

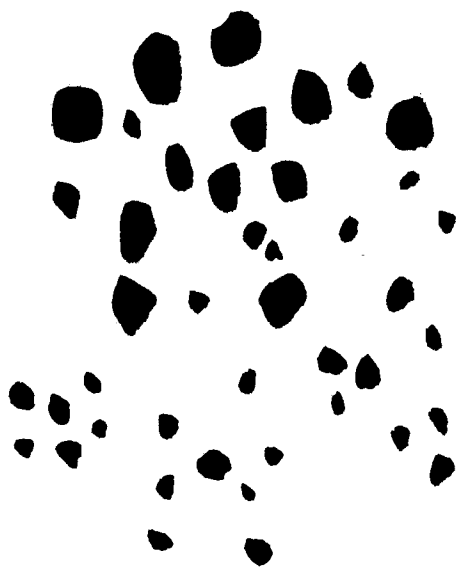
單純な生活

阿部昭



單純な生活

阿部昭



単純な生活

昭和五十七年八月十五日 第一刷発行

著者——阿部昭

© Akira Abe 1982, Printed in Japan



発行者——三木章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三一九四一 二二 振替東京一五〇〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一五〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

単純な生活

装帧・カット
大沢昌助

毎朝、私は子供たちが起き出す少し前に目が覚めるが、さめてもしばらくはじっとしている。あるいは、起きて着換えをしたあと、自分の部屋でぼんやり煙草を吹かしている。

なにも急ぐことはない。彼等は三人とも学校へ行くのに、私はどこといって行くところはないのだから。私が起きて行っても、食卓の混雑が無用に増すばかりだろう。その上、一分刻みの行動で血相を変えている子供たちと、それを傍から叱咤している母親との戦争みたいな空気にも巻き込まれずには済まない。それが厭だから、床の中で時間をつぶしているのである。

大抵は誰に起されるでもなく、自然に目がさめる。向いの家の若い主人が車庫をあけて通勤用のオートバイを引っぱり出す、その気配で目がさめることもある。あいにく私はいちばん道路に近い北側の部屋で寝ているから、エンジンの音ばかりか、「パパ、パパ、……」という二人の幼児のよく通る声や、「行ってらっしゃい」という奥さんの控え目な発声まで聞きとれる。主人が出かけたあと、奥さんが車庫の戸を閉める音がして、また静かになる。しかし、私はもう目をつぶりにくくなっている。

正直なところ、このオートパイには抗議したくなることもあるのだが、あれこれ考えているうちに私はその気がなくなる。自分もかつてはあんなふうにして会社へ行ったものだ。まだ小さかった子供たちに代る代る「行ってらっしゃい」を言われ、手を振られたり振ったりしながら出かけたものだ。十何年そういう生活をして、それから今度はずっと家にいるようになった。いまだでは誰も私に「行ってらっしゃい」とは言わず、私も子供たちに「行っておいで」とは言わないのであるが。

そうして私にはまた別な気持もある。向いの主人はああやって雨の日でも風の日でもオートパイで出て行くのに、自分はこうして悠々と寝ている。仕事が違うのだから仕方がないが、それでもやはり私はそのことをなにか引け目のように感じる。自分だけがまともな世間の生活からはみ出し、取り残されているような淋しさも否定しきれないのである。

時によると、私は家にいる何匹かの猫のどれかに起されることもある。冷たい鼻面を顔に押しつけてくるのはいいほうで、中の一匹にひどく咬む癖のあるのがいる。そいつが蒲団にもぐって私の手の指を噛んだり、喉笛のあたりに食いついたりする。そんな時、私はなるほど猫は猛獣の仲間かと再確認したような気になるが、とにかく痛いののでいやでも目がさめてしまう。猫は猫の都合で、外へ出せとか、腹が減ったとか言いに来ているのだ。そして、私が億劫がつて応じないでいると、しまいには私の胸だの腹だのの上に乗っかって、起きないのならこの通りだと言わんばかりに坐り込みの手段に出るのである。

考えてみると、もう久しく、特別に頼んでもおかない限り、誰も朝私を起しに来たりはしない。以前は、子供たちが順番に起しに来た。上の子が大きくなると下の子が、その子が大きくなるとまたつぎの子が、というふうに、何年かの間、父親の目を覚まさせるのは子供の役目だった。彼等は入れ代り立ち代り、いま猫がするようなことを私にしたものだ。しかし、その子供たちももうそんなことをする年齢ではなくなった。彼等は彼等で時間割を揃えたり髪をなでつけたり靴を探したり、自分の事だけで精一杯なのである。

子供が生れる前は、私を起すのは妻の仕事だった。仕事というより、これは新婚時代の楽しい遊戯みたいなものだったろうと思う。そうしてその前は、母親であった。私は三人兄弟の末っ子で、しかも遅くに生れた子供だったから、甘やかされ方も人一倍だった。朝、私がいつまでも寢床から離れられないでいると、母は台所と私の寝ている部屋とを行ったり来たりして、声をかけるだけでなく、枕元に坐り込んで頬ずりしたり接吻を浴びせたりした。そんな時、母は私のことをさまざまなおまけの愛称で、鳥がさえずるみたいに連呼したものである。●
それが、いまでは、猫だけである。おまけに、食いつかれて悲鳴とともに目をさますのである。しかし、猫でも居ないよりはましかもしれない。

やっと起き出して服を着て、炬燵のある畳の部屋から南側の板の間へ移動する。

この部屋は南が海に向いている。海岸までは歩いて二、三分であるが、家が立て込んでいて海が見えるところではない。潮の音も、昼間は近くを走る車の音にかき消されて、めったに聞えない。この時刻に聞かれるのは、何種類もの小鳥のにぎやかな囀りだけである。しかし、私は彼等の名前を知らないし、彼等の言葉を理解しない。簡単すぎて理解できないといったところだ。

私は少しでも日光がほしくて空を見上げるのだが、太陽がまわってくるまでには時間がかかる。それでもストロープをつけるのを一日延ばしにしているのは、二時間もすれば、私の部屋は海辺の光線で汗ばむほど暖くなるからである。

窓をあけて庭を眺める。庭と言えば体裁がいいが、砂地で樹木が育たないせいもあって、小さな松や干からびた灌木のほかは、枯木然としたいぬアカシアの列が、薄ら寒い風に葉の落ちた枝をふるわせているばかりである。

私は猫が軒下のバケツの水を飲んでいるのを見る。すると、自分も水をつめたさを咽喉に感じる。その猫がつぎには湿った土の上をそろそろと歩いて行く。と、私もあしつら蹠あしつらに土のしめり気

をおぼえる。そうして猫が草の茂みを分けて進んで行くのを見てみると、今度は自分の首すじにも露のしずくが降りかかるようで、ぞくぞくしてくるのである。つまりは、私はそれくらい横着になっているのだ。

どうやら私は、永年の喫煙で嗅覚も大分駄目になっているらしい。毎朝こうして窓をあけて空気を入れ換えるたびに、そのことを知らされる。というのも、冷え切った部屋のあちこちに、ゆうべの煙草のにおいがこびりついていることが、この時だけはわかるからである。そして、前夜そんなに煙草を吸ったということは、文字通りたくさん仕事をしたか、反対に全然仕事が捗らなくて時間を空費してしまったかのどちらかである。

単純な生活

炬燵の上の原稿用紙には、たった一行、そう書きつけてあった。この幾日か、ずっとそのままであった。その白いページの上で、私はもっぱら煙草を吸ったり、お茶を飲んだり、菓子をつまんだりしていたのである。おかげで紙のあちこちにしみが出来ていた。そうして、けさもまたそれを目にしたとたん、私は気づまりをおぼえた。実のところ、こんな題名で今度の仕事を始めたことに、少々自信をなくしかけていたからである。

単純な生活とはなにか。読者にそうたずねられても、作者として答えられそうもない。「さしあたって、それは私が書くこうとしている本の名前である」といったのでは答にならないだろう。「単純な生活も私の大好きな言葉で、だからこの二つをくっつけた言葉は私の気に入って

いる」というだけでは読者も迷惑にちがいない。その上、これから私が描いてお目にかける生活こそが単純な生活である、と言うつもりもまったくないのである。どこに単純な生活があるのか。

現実に、私の生活は単純なと言うにはあまりにも遠いものだ。一年のほとんどをこんな海辺の町に逼塞して、変化のない毎日を送っている私のような人間にしてからが、単純な生活からはとっくに見はなされているのである。現代というこの時代に傷めつけられて鱗うろこが入った私の精神、およそ純粹無垢とは反対な私の心、そんなものを包んでいる私の肉体というこのくたびれた不完全な容れもの、こみ入って実体がかめぬないか実体がなくてうわべだけの人間関係、それでもとにかく生きて行くための毎日のややこしい手続き、——こういうものはむしろ複雑怪奇な生活と言ったほうがよさそうではないか。

残念ながら、単純な生活などは、いまの私には夢でしかない。こんなふうに生きられたらという願望でしかない。それにもかかわらず、私はこの題名を選んだ。いや、私が選んだというより、題名のほうが向うからやって来て私をつかまえたのである。かつて、無縁の生活とか、人生の一日とか、言葉ありきとかいう言葉が私をつかまえたように。それゆえ、私がいかに単純ならざる生活をお目にかけることになっても、読者は、われわれにはいつだってもっと単純に生きられたらという気持があるのだということを思い出していただきたい。

そもそも、単純とはなにか。さしずめ、それは複雑でないことだろうと思う。

四、五日前のことである。私は調べものの必要があつて、古い新聞の切抜きを探し出した。そして、用が済んだので、丸めて捨てる前に裏にも目を通した。すると、そこにカモノハシに關する記事が載っていたのである。

御承知の通り、カモノハシはオーストラリアにしかない珍獣で、だから私もこの目で見たわけではない。どこかの動物園で見たような気がしているのは、絵本か写真で見てそんな気がしているのだろう。あるいは、川かわ獺ちろそかなにかと混同しているのかもしれない。

動物学者の説明によると、——カモノハシの口は文字通り鴨の嘴はで、くちばしである。しかし、鳥とは違う。足が四本である。ところが、その足には水かきが付いていて、だから鴨に似ているのである。しかし、身体は羽毛でなくて、獣毛で被われている。(私は子供の頃、近くの海岸で漁師の網にかかったアザラシの仔の背中を撫でたことがあるが、あんな感触かしらと思ふ。)ところが、カモノハシは卵を生む。しかし、卵からかえった仔は乳で育てるのである。だから、哺乳類の仲間である。ところが、単孔類ないし一穴目と称されるように、大、小便と卵の出る所が同じという仕組で、だから鳥とおんなじである。……

言われてみれば、なるほどけつたいな動物である。それは、右の私の短い文章で「しかし」と「ところが」と「だから」を三回ずつも使わなくてはならなかったのを見てわかる通りである。一般に、複雑なことを正確に説明しようとすれば、このようにひどい文章になることも避けられないのである。

しかし、それよりもっとおかしなのは、この珍動物の死体が初めてイギリスに紹介された時、動物学者たちは全然信用しなかった、というくだりであった。いろんな動物の部品をくっつけてこしらえたニセモノである、と断定したのである。不幸にして、この断定は、その後生きたカモノハシが紹介されるまで、くつがえされることはなかった。

私は、この滑稽なカモノハシと、同じくらい滑稽な昔の学者たちの話をよろこんだ。さきほどの題名のこと頭にあつたからである。

「ね、やっぱりそうなんだ。物事はやはり単純でなくてはならんのだ。複雑なもののはうさんくさいのだ。鴨や川獺なら人はこうまで怪しみはせぬ。鴨でもあり川獺でもあるようで、実はそのどちらでもないからカモノハシはニセモノ呼ばわりされたのだ。……」

とはいふものの、私にはカモノハシを笑う資格も、昔の学者を笑う資格もないことがわかつている。私の現在の生活も、なんだかカモノハシのややこしい形態に似ていないだろうか。「しかし」だの「ところが」だの「だから」だのを連発して、ああでもないこうでもないといふと説明してみても、やはりどうもうまく片づかない、けつたいな生活ではないだろうか。そうして

結局は、いろんな部品をくつつけて作ったニセモノであると断定されても仕方のないようなものではないのか。

四

いつまでも題名にこだわるようで気がひけるが、単純とはなにかといえは、もう一つは裸と
いうことだろうと思う。

どこの家でも父親がするのように、私も三人の子供を何年もの間、つぎつぎと風呂に入れた覚えがある。末の息子とは、ついこないだまで一緒に入っていたような気がする。

自分の身体はあと回しにして、よく洗ってやり、首までお湯に浸らせて、——覚えてたの、あやふやな英語で五十まで無理やり教えさせたりして、——先に出す。すると、子供はびしょ濡れのまんまで、

「ストリー・キングだア！」

と叫びながら、家じゅうを走りまわった。

アメリカの若者の間で発生したというストリーキング——例の素っ裸で人前を突っ切るデモンストレーション——が日本にも輸入されて、真似をする連中が出た頃である。だから、そんな昔のことではない。子供はそれを、なんとかキングといった怪物の一種というふうに思っ

いたのである。

湯上がりのストリーカーは、たちまち母親につかまってしまふ。頭からすばやくバスタオルでくるまれ、もみくちゃにされ、シッカロールを塗りたくられる。子供はその間じゅう、

「くすぐりたい、くすぐりたい、……」

と身悶えして笑いこぼした。「くすぐりたい」という意味である。

なにしろ片言をあやつるのに忙しい時期だった。それならば、という所を「ちょいならば」、ゲロ吐くを「ゲリ吐く」、テレビのアンテナは「ヤンテナ」、コールドは「コールド」、暖房は「ランボー」、乳母車を「うがぐるま」、太田胃散を「おおたくさん」、英隠元を「さやにんげん」、天ぶらの衣を「天ぶらの子供」などと言っていた。

その子供もやがて小学校にあがったが、なにを思ったか、入学早々のある日、学校でストリーキングをやつてのけた。父親の私はそれほどびっくりもしなかった。しかし、母親はひどく仰天して、あわてて「れんらくちょう」とびついた。これは家庭と担任の先生との間の連絡用の手帳で、相談したいことがあればなんでも書いて、子供に持たせるのである。おおよそこんな文面であった。――

某月某日

先生、又々、シヨックな事件です。うちの息子が、学校の廊下をまるはだかで走り、大評

判になっているという情報が入りました。本人にたずねましたら、ぬがされた!! と申しませんが、自分もぬぐ気になったようです。恥ずかしくて、これからは授業参観にも行かれませぬ。先生、助けて下さい。

彼女がいかに動揺していたかは、その息せき切った手紙の書きっぷりからも察せられた。彼女に限らない、大人は裸になる代りに、着飾ったり化粧したりして、生れたままの姿からどんな遠ざかる。だから子供の裸を見てもどきまぎしてしまふのである。しかし、もう安心していい頃だろう。その息子もいまでは五年生だ。誰に頼まれたって、人前でかんとんに裸になりはしないだろうから。

西洋の宗映画などでは、幼児の恰好をした裸の天使が、肩から羽根を生やしてさかんに宙を飛び回っている。私は、天使がどういうわけでみんな裸なのか、また人間がどうして天使になれないかということを考える。そして、大人になるとは、人間は天使にはなれないと知ることかもしれないと思う。

もう二十年近い昔になる。その頃、私はまだ二十代の青年だったが、ある年の夏、マリリン・モンローが死んだというニュースが伝えられた。ベッドでなにも身に着けないで、受話器を握りしめたまま、うつぶせになって死んでいるのが発見されたということであった。いまの若い人たちにはほとんど伝説のようなものでしかないだろう。

彼女の伝記を読んでみると、その生活は虚飾と名声に包まれた眩い外見に反して、実に淋しいものであったことがわかる。そうして彼女は大きな閑散とした家の中で、ハウスキーパーもいない真夜中に、ごく普通の孤独な女が死ぬようにして死んだのである。

「マリリンの遺体は、筒状に布を張った担架にくるまれ、さらにブルーの毛布にしっかりと巻かれたうえで、ロサンゼルス郡死体公示場に、解剖のため、はこばれた。マリリンは、ロサンゼルス郡検屍官事務所の解剖調査処理番号八一二八番の死体となった。」

現代では、大人もこのようにしていま一度生れたままの姿にもどることがある、と言えるかもしれない。マリリンもいくぶんかは子供のような女だったらしい。しかし、天使の裸とも幼児の裸とも違って、彼女の冷たくなつた裸は誰にも祝福されなかった。それは毛布にくるまれて丁重に運び出されたが、待っていたのはカメラマンのフラッシュと検屍官であつた。検屍官は男だったが、彼といえどもこの裸は少しもありがたくはなかつた。

五

子供たち三人が出払つた頃合いを見はからつて、ようやく私は洗面を済ませ、茶の間に顔を出す。

毎朝、子供が出たあとの部屋は、テーブルにパン屑が散らばっていたり飲み物がこぼれてい